

問題児たちと『黄金の回転』が異世界から来るそうですよ？

あかひ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界初、馬による北アメリカ大陸横断レース『ステイール・ボール・ラン』レース。

紆余曲折ありつつも『ジョニー・ジョースター』はアメリカ横断に成功した。しかしレースの途中で無二の親友『ジャイロ・ツェペリ』は命を落としてしまう。

ジョニーは彼の遺体を家族のもとへ届けるためヨーロッパ行きの船に乗った。

だが彼はその船に乗ることが新たな旅の始まりだとは予想すらしていなかった。

## 追記

作者は現在持ち前の怠惰な性格をいかなく発揮し大変遅筆です。

しかし、失踪だけはするつもりはなく今現在も最新話の執筆をしている途中でありどれだけかかっても更新するつもりなので、気長にお待ちいただければ幸いです。

(R2/05/02)

# 目次

## プロローグ

0.	回転の軌跡―ゼロはマイナスへ―	1
Yes! ウサギが呼びました!		
1.	新たな出会い、新たな仲間	7
2.	保証OK	12
3.	牙―問題児のとぼちり―	17
4.	ノーネームの真実	25
5.	初ゲーム前日	29
6.	確固たる目的	34
7.	ギフト	39
8.	聖人の遺体	44
9.	ハンティング	49

## プロローグ

### 0. 回転の軌跡―ゼロはマイナスへ―

——これは『再生の物語』——

船着場に棒切れを杖代わりに使い青年が歩いてくる。彼のそばには馬がおり、馬乗りなのだろうと予想ができる。

港には船が停泊しており出港はまだかとエンジンを燻らせている。

「!! あれっ!」

船の上いる小柄な男性が青年に気がつくと、彼——名をジョニー・ジョースターという——も男性に気がついたようであった。友人というよりはおそらく顔見知り程度なのだろうということが態度から見て取れる。

「おや、君は……元気か？ 何しているんだ？ こんな船の上で……? この船、ヨーロッパ行きだね?」

「何してるって……私の本職は税関職員ですから……」

——文字通り僕が再び歩き始めることになったいきさつ——

「ステイールボールランS B Rレースの係員は臨時で派遣されたものです……。ところでジョニー・ジョースターさん、その積み荷は何ですか?」

小柄な男性が尋ねる。ジョニーは馬と共に大きな木箱を引きずつて来ていた。

その箱は人が一人まるまる入るほどの大きさであり、見る人によっては棺桶と見間違う大きさであった。

もちろん彼も仕事だ。いくら顔見知りであったとしても怪しい荷物を船に載せることはできない。

——そして思い返せば旅の間はずっと『祈り』続け——

『遺体』だ」

手に持った『鉄球』をトンと木箱に当てる。自らは何も間違えていないと、己の考えを改めるつもりは無いと決意の籠もった瞳で真っ直ぐ答えた。

「友達の『遺体』それと友人の愛馬ヴァルキリー」

——この馬による大陸横断レースは『祈り』の旅でもあったのだ

「この船で彼の故郷へ連れて帰る、そして家族へ渡すんだ」

それは彼のやらなければならぬ事。

その口調は、瞳は、心はたとえ犯罪まがいの事をしてでも連れて帰るという彼の意思がありありと見て取れる。

——明日の天気を『祈り』——

「えくと……馬はいいですが『遺体』の乗船許可は規則により出せません。誠に残念ですが火葬で遺灰になさるかこの国で埋葬してください」

だが、向こうも仕事。たとえどんな理由があろうと規則は守らなければいけない。

彼だけが特別、そんなもの通用するわけがないのだ。そんな事は誰でもわかる、もちろんジョニイも。

——朝 起きたら目の前の大地に道がある事を『祈る』——

「なるほど、じゃあ僕がいい解決策を教えてやろう。お前が……乗船許可を取ってこい」

しかし、知っていてなお考えを変えるつもりはないのだった。

無茶な話だ。解決策になってすらいない。しかし、彼は相手が何を

言おうと意思を変えるつもりがないらしい。そういう男なのだ。

——眠る場所と食料がある事を『祈り』——

「絶対に友達は彼の祖国へ連れて帰る……絶対にだ！ ワイロが欲しいなら払うぜ」

——焚き火に火がつくことを『祈る』——

「おいッ！ みんな来てくれッ！」

「全員集めろッ！ こっちだッ！」

「この積み荷を力ずくでおろせ！」

「ヤレエーッ」

小柄な男性——その誰もが似たような背丈に容姿をしている——が数人ほど出てきて全員で木箱へと掴みかかり強引にへから下ろそうと引きずり始める。

——このあたり前の事をくり返しながら——

ジョニイはなんの抵抗もせずその様を見守っていた。

もちろん諦めた訳では無い。木箱は奇妙な回転をして男性たちの手をすり抜け元の位置に戻る。

「どういうわけか……絶対に船から下ろせないんだなこれが……すでに無理、出航させるしか無いんだよ」

『ニヨホホ』

まるでこうなるのがわかっていたようで、先程まで賄賂がどうと言っていた人物とは思えぬ落ち着き用であった。

そして何よりもジョニイのとなりでは、少し大型で鎖帷子を着たような人型の何かが奇妙な笑い声を上げている。どうやらジョニイ以外にはこの人型は見えていないらしい。

——友と馬の無事を『祈る』——

「必要ならおまえが乗船許可を取ってこい！……いいな？ なんの問題もないだろ？」

彼は傲慢に言い放ち、船に乗り込んだ。

ここまで来るともはや呆れが優ったのだろう、職員達はこれはまた面倒な客だと疲れた表情で船内に戻って行った。

——そしてひとつひとつの河を渡る——

思えば彼と二人で旅してきた日々は楽しいことだらけで。

目を瞑ればアメリカの端から端まで余すところなく思い出せる。それは最早単なる脳の記憶ではなく魂に刻み込まれた思い出なのだと感じる。

『『祈って』おこうかな……航海の無事を……』

そう、今までがそうだったように。

これからもそうであるように。

——今、最後の河を渡り終わった——

汽笛がなる。出港の合図だ。

僕は未だ見えぬ大西洋の先を見つめていた。

「この大西洋を渡って家に帰ろう……」

家に……

帰ろう……

\*

翌日、ジョニーは船の中で目を覚ました。船の個室に一泊した彼は一つあくびをした後に大きく伸びをした。

SBRレースは文字通り命懸けの大陸横断レース、常に敵を警戒しなくては今こうしてあくびなどできていない。

こうして警戒をしないで寝たのは久しぶりだった。

「！ おや？」

そこでジョニーは個室に備え付けられた机に手紙が乗っていることに気づく。

その手紙には『Dear Johnny Joestar』と。

「僕宛か……いつの間に……」

ジョニーは手紙を手に取り椅子に腰掛け封を切る。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの『箱庭』に来られたし』

「？ いったいなんだこの手紙は。結構いい紙を使ってるしどこぞの貴族からの招待状か……？ まあ、いいか」

手紙を捨てようと足に力を入れゴミ箱へ向かう……

「えっ？ なっ！」

しかしそれは叶わなかった。

足に力が入らないのである。

「馬鹿なッ！ さっきまでは歩いてたのに！ 足は使えたんだッ！

」

机を支えに立ち上がってみても、支えを失った瞬間床に崩れ落ちる。

歩けない

それはジョニーにとっては絶望的なことだった。大親友とすごしてきた約半年が無駄になってしまったように感じてしまう。

「まさかつ！ この手紙が原因！ すでに何か攻撃を受けているッ！」

ジョニーがそう考えるのも無理は無い。

なぜならその手紙は光っているのだから。

「くそッ！ こんな手紙！」

送り主の分からない手紙を破り捨てようとしたとき――

ジョニー・ジョースターはこの世界から消えた。

これは僕が再び歩き出す物語

この物語は僕がもう一度、心身共に前へ歩き出す物語

僕は今、ゼロからマイナスへと落ちた

もう一度ゼロへ……いや、彼は命懸けで僕にゼロへと至る道を教えてくれたんだ、いつまでもゼロではいられない

マイナスからゼロを超え――プラスへと向かっていく

そんな物語をここに綴る

問題児たちと『黄金の回転』も異世界から来るそうですよっ..

Yes! ウサギが呼びました!

1. 新たな出会い、新たな仲間

「くそッ! こんな手紙!!」

送り主の分からない手紙を破り捨てようとしたとき、ジョニーの視界は一瞬で空へと移り変わった。

それを認識した数瞬後、身体は重力に従って下へと落ちていく。

「なっ! うおおおおおおあああああッ!!」

ジョニーが投げ出されたのは高度四〇〇メートル。

日本一の山、富士山よりも少し高い位置からのひもなしバンジー。要は落ちたら死は免れないだろう。

他にも三人ほど落ちていたがそつちに気を回してやる余裕はない。

（くそッ! もうダメだ!）

彼の力ではどうする事も出来ない。

ここで彼の、彼らの命は潰えたかに見えた。

「わっ!」

「きやつ!」

「ぐッ!」

ボチャン、と着水。湖に落ちる前にあった緩衝材のような薄い水膜で勢いが衰えていたため四人は無事のようなようだ。

しかしジョニーは未だ生命の危機を免れてはいなかった。なぜなら湖とはつまり水深のある水溜りのことだ。それが何を意味するかと言うと――

「うぶ、がぼ、ぐぶ、はっ、ぶぐ」

（息が、できないッ!）

そう、ジョニー・ジョースターは今しがた、脚が動かなくなったのだ。

つまり、泳げない、いや泳げるかもしれないがとつさに脚を使わずに泳ぐのは限りなく無理に近い。

（<sup>タスク</sup>牙さえ使えればッ!）

「何やってんだよ」

瞬間、息ができるように、呼吸が楽になった。

誰かに引っ張られているのだ。彼はヤハハと笑いながら僕を岸の方へと連れていってくれた。

「ゲホッゴホッ、すまない、助かった」

「気にすんな」

そのまま彼は僕を岸まで引っ張り上げると、ほかのふたり同様服を絞り始めた。

「し、信じられないわ！ まさか問答無用で引き摺りこんだ拳句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だな」

「……………いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

僕を助けてくれた金髪の彼と傲慢そうな彼女は友人なのだろうか。ともあれまずは現状確認が優先だ、持ち物は……………たまたま近くにあった小さめのバックだけか。

中にはハーブと鉄球が入っていたはず。

そこまで思考を回していると、もうひとりの少女が口を開いた

「此処……………どこだろう？」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいのが見えたしどこぞの大亀の背中じゃねえか？」

（確かインドかどつかの神話でそんなのがあったな。平行世界を移動するどころか別世界に来てしまうとは）

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴方は？」

「……………春日部 耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。次にそのバンドナを着けている貴方は？」

「僕か？ 僕はジョニー・ジョースターだ」

「外人さん？ 日本語がお上手ね」

（そう言えば僕はさつきから日本語を喋っている、あの手紙のスタンドのせいかな？ まあ、意思疎通できるのはありがたい）

「最後に野蛮で凶暴そうなのその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

そんな三人を警戒しながら見ているジョニー。

（案外この三人は敵ってわけではなさそうだな）

そんな彼らを物陰から観察している影がひとつ。

（うわあ………なんか問題児ばかりみたいですねえ………）

と、少女の影はため息を漏らすのであった。

\*

「で、呼び出されたはいいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

十六夜は苛立いらだたしげに言った。

「そうね。何の説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「君も大概人のこと言えないけどな」

(全くです)

物陰から観察している少女はこつそりツツコミを入れた。しかし、ここでずつと観察していても状況は変わらない。

そろそろ出て行こうかと思っていた時、

「——仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも話を聞くか?」

「なんだ、貴方も気づいていたの?」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ? そっちの猫を抱いてるやつと外人さんも気づいてんだろ?」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「こういう気配には敏感だからな」

「…………へえ? 面白いなお前ら」

四人に睨まれた少女、黒ウサギはやや怯みつつも四人の前に出てきた。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいな怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ? ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「どうする? 何かやられる前に殺つとくか?」

「あつは、取りつくシマもないですね♪ ジョニイさんに至つては容赦を微塵も感じれません♪」

(肝っ玉は及第点。この状況でNOと言える勝ち気は買いです。これでもう少し扱い安ければ良かったんですが…………)

四人の値踏みに思考を没頭させている黒ウサギ——の後から春日部が不思議そうに近づき頭部についたうさ耳を、

「えい」

「フギャー!」

力いっぱい引つ張った。

「ちよつ、ちよつとお待ちを！ 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引っこ抜きにかかるとはどういう了見ですか!？」

「好奇心の為せる技」

「自由にも程があります！」

「へえ？ この耳って本物なのか」

今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。

「……………なら、私も」

今度は飛鳥が左から。左右に力いっぱい引つ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

## 2. 保証OK

### 2. 保証OK

「——あ、あり得ない。あり得ないのでですよ。まさか話を聞いてもらう為に小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス」

「学級でも何でもないんじゃないか？　そもそもの話」

「うっ、揚げ足を取らないで下さい！」

「いいからさっさと進めろ」

半ば本気の涙を浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いてもらえる状況を作ること成功した。

先程三人が黒ウサギをいじっている間、ジョニイは近くの状況を観察していた。

（此処には黄金長方形もちゃんとあるみたいだ。だが、馬だ。移動にも攻撃にも馬と鎧あぶみが必要だ……。どうするか）

と、黒ウサギの説明が始まりジョニイは思考を一旦止めた。

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？　言いますよ？　さあ、いいですよ！　ようこそ箱庭の世界へ！——」

黒うさぎの言ったことを要約するところがいい。

・超能力を持った人間を『ギフトゲーム』なるものに参加させるために呼び出した。

・『ギフトゲーム』とは、神々から貰った恩恵、つまり超能力を使つたゲームのこと

・この箱庭では必ずコミュニティに属さなければいけない

・『ギフトゲーム』に勝てば提示された商品を手に入れることができる

・参加するためにはチップが必要。チップには、金品・土地・利権・名誉・人間など更にはギフトまでも賭けられる

だいたいこんなもんだった。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界におけるすべての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

「ちよつと待ってくれ、質問いいか？」

「はい、何の質問です？」

「まず第一に、例えば僕が今すぐ帰りたい。と言ったら帰れるのか？」

「いえ、今すぐは難しいですね」

やはり、とジョニイの予想通りの解答をした黒うさぎを見る。

彼女はさつき『皆さんの召喚を依頼した』と言っていた。つまり召喚したのは彼女では無く別の誰かだ。なら、帰るのもそいつに頼まなければいけないのかもしれない。

ジョニイはほかの三人とは違い、前の世界に未練がない訳じゃない、少なくとも親友の遺体を家族に届けなくてはいけない。

「次に、この世界には有り<sup>と</sup>有らゆる『ギフト』が存在しているんだよな」

「はいな、人造のギフトから神話に<sup>のつと</sup>つたギフトまで様々なものがあります」

次の質問もジョニイにとっては先の質問と重要度は同じだ。この箱庭に来る代償として失ったようなものなのだから。

「そのギフトは僕の脚を治せるか？」

「と言いますと？」

「僕のこの動かない足が治るのかって聞いているんだッ！」

「……それはわかりません。黒ウサギもすべてのギフトを把握しているわけでは無いので」

「……そうか。じゃあ最後の質問だ」

「何でしょう？」

「あんたらは何者だ？」

「先ほど話したように、あなた達を箱庭に——」

「あんたらは誰に雇われている？ 大統領が保険として雇っていたのか？ また並行世界から来たD i oにか？ それともそれ以外の誰かか？」

質問に答えようとした黒ウサギだが、それを新たな質問によって遮られる。

「・・・？ 話の意図がつかめないのですが・・・」

「この世界はスタンドで創ったのか？」

「だから何を言っているのか」

「そうよジョニイくん。確かに疑うのも無理ないけど勝手に決め付けるのはどうかと思うわ」

「そうだけ、ジョニイ。そもそも大統領とかD i oって誰だよ」

「・・・」

ジョニイは何よりも冷たい眼で黒うさぎを含めた四人をみた。

「まさかお前達ぐるなんじゃあないか!」

「・・・ツー」

久藤や十六夜の目が敵を見る目になったのに気づき、ジョニイは一度冷静になる。

「・・・冗談だよ、ウソ・・・落ち着けよ」

ジョニイは四人に言った後、自分に言い聞かせるように呟く。

「そう・・・落ち着けて・・・僕の方がな・・・」

一度頭を冷し考えをまとめていく。

「四人は今出会ったばかりだ。グルの可能性は低い。そもそもこれがスタンドなら能力が一つじゃあない」

ジョニイは『とりあえず付いて行く』という結論に至った。

「すまない、さっきは取り乱した。まずあなたのコミュニケーションに行けばいいんだろ？ 何か乗るものはないか？ なんでもいい、馬とかそういうの」

「でしたら少し待っててください。森の中から連れてきます」

野生の馬を連れてくると言って森の中に入っていった黒ウサギ。

ジョニイは、鎧が無い。と思ったが今は状況が状況なのでしかたがないと思う事にした。

数分後、黒ウサギが馬を連れてきた。

当然鎧も手綱も鞍も無い。が割り切つて馬に乗り込む。

「乗るの手伝いしましょうか？」

「いや、大丈夫だ」

黒ウサギが親切で聞いてきてくれるんだろうが、今回ばかりは必要が無いだろう。

ジョニイは馬の頭に体を寄せそのまま体を回す。

「すごい」

春日部が驚嘆の声を上げる。確かに、こんな乗り方をする人などいないだろう。それ以前に足が動かないのに馬に乗るやつなんてジョニイくらいだ。

「僕はもう何時でも行けるぜ」

「で、では我々のコミュニティに

「ちよつと待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

今度は今まで静聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立つ。ずつと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっていることに気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返す。

「………どういった質問です？ ルールですか？ ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。俺が聞きたいのは……たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は黒ウサギから視線を外し、他の三人を見回し、巨大な天幕によつて覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は面白いか？」

「」

「——Yes。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

### 3. 牙―問題児のとぼっちり―

#### 3. 牙―問題児のとぼっちり―

場所は箱庭二一〇五三八〇外門

箱庭の外壁と内壁をつなぐ階段の前で少年、ジンⅡラッセルはいた。一人誰かを待っているようだ。

先程まで子供たちがここで騒いでいたが、待ちくたびれて帰ってしまったのだろう。

そこに彼を呼ぶ声が一つ

「ジン坊っちゃーン！ 新しい方を連れてきましたよー！」

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「はいな、こちらの御四人様が――」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カチン、と固まる黒ウサギ。

「・・・え、あれ？ もう二人いませんでしたっけ？ ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方と、あの馬に乗っていた、我儘わがままや注文の多い、全身から『俺も問題児！』ってオーラを放っている殿方が」

「ああ、十六夜君のこと？ 彼なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」

「じゃ、じゃあジョニイさんは・・・」

「ジョニイなら十六夜が『ヤハハ、こいつも連れていくぜ』って」  
「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

「止めてくれるなよ」と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!?!」

「『黒ウサギには言うなよ』と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！ 実は面倒くさかつただけでしょう御二人さん！」

「うん」

ガクリ、と前のめりに倒れる。新たな人材に心を踊らせていたら、

まさかこんな問題児ばかり掴まされるなんて嫌がらせにも程がある。そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。

「た、大変です！　『世界の果て』にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に『世界の果て』付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？・・・斬新？」

「冗談を言っている場合じゃありません！」

ジンは必死に事の重大さを訴えるが、二人は叱られても肩を竦めるだけである。

黒ウサギはため息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ・・・ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御二人のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児達を捕まえに参ります。事のついでに——『箱庭の貴族』と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

悲しみから立ち直った黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、艶のある黒い髪を淡い緋色に染めていく。

「一刻ほどで戻ります！　皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あつという間に三人の視界から消え去っていった。

「箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

巻き上がる風から髪の毛を庇う様に抑えていた久藤が呟く。

「凄いね三毛猫、私も黒ウサギと友達になったらあんな風に速く跳べるのかな？」

『お嬢にあんな速う跳ばれたらワシが適わんわ』

「ふふ、そうだね」

春日部は春日部で黒ウサギを話題にしているようだ。

「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいるかしら？」  
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジンⅡラツセルです。年齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願ひします。二人の名前は？」

「久藤飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

ジンが礼儀正しく自己紹介をすると、飛鳥と耀はそれに倣って一礼した。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取り、胸を躍らせるような笑顔で箱庭の外門をくぐるのだった。

「あーもう！ 一体どこまで行っちゃったんですか!？」

黒ウサギは十六夜達を探して半刻が過ぎようとしている。

彼らの身を案じ、焦りを募らせ走る黒ウサギだったが、背後から声をかけられ足を止める。

「ん？ おや、誰かと思えば。君、黒ウサギかい？ 随分雰囲気が変わったね。どうしたんだい？ その髪、赤色・・・いや、緋色になつてるぜ？」

「ジョニイさん！ 良かった、十六夜さんは御一緒では？」

「いや、逆廻なら先に行つたぜ。おかしな話だよな、僕を連れて来といて置いていくんだぜ？」

「アハハ、全く十六夜さんは自由すぎますヨ」

笑って誤魔化そうとするが、十六夜の自由人っぷりは誤魔化せない。ガクリと肩を落とす。

「では、十六夜さんはこの先に?」

「ああ、この先にいるぜ・・・たぶん」

「え! 今なんて言いました? ちよつと待つてください! 今、小さくたぶんで付け足しませんでした? たぶんツ!」

「うるさいな、大丈夫だ。いるつて・・・きつと」

「何ですかそれ!? きつと!」

「うるさいな、行けばわかることだろ?」

ギャーギャーと叫ぶ黒ウサギを置いて馬を走らせるジヨニイと、それを追いかける黒ウサギ。

彼女はジヨニイにストップをかける

「まっ、待つてください——」

しかし言い切ることはできなかった

黒ウサギのセリフを遮ったのは巨大な大地の揺れだった

「うおッ! なんだ!」

「わわ! ま、まさか、十六夜さんが幻獣と!」

黒ウサギはすかさず大河の方角を見ると、彼方には肉眼で確認できるほど巨大な水柱が幾つも立ち上がっている。

「幻獣が何かはわからないが、取り敢えずヤバイつてことはわかった! 早く行こう!」

「はい!」

黒ウサギとジヨニイは先を急いだ。

「この辺りのはず・・・」

黒ウサギが辺りを見回すとまたも背後から声がかかった。

「ジヨニイ、遅いぜ」

「遅いつて・・・。君が速すぎるんだよ」

ジヨニイは馬から降りて少し馬を休ませる。

ほんの数刻だけだが足場の悪い森の中を走ってきたのだ。度々休ませてやらないと馬の足が壊れてしまう。

「そうか? . . . あれ、お前黒ウサギか?」

黒ウサギ達に気づいた十六夜は二人に声をかける。

ジョニイは十六夜と軽く会話をしているが、黒ウサギは異世界から呼んで早々に二人に振り回されたからか怒髪天を衝くような怒りを込めて勢いよく十六夜に声をかける。

「もう、二人して一体何処まで来ているんですか!?!」

「“世界の果て”まで来ているんですよ、つと」

「ああ、見ればわかるだろ。というかあんたはこの世界に住んでいるんだろう? もしかしてあんたは俗に言う馬鹿ってやつかい?」

「く、黒ウサギは馬鹿じゃありません!」

ジョニイの茶化して更に怒っていく黒ウサギ

「まあそんなに怒るなよ」

十六夜の憎たらしい笑顔も健在だ。心配して急いで来たがそれは希有だったようだ。

「しかしいい足だな。遊んでいたとはいえこんな短時間で俺に追いつけるとは思わなかった」

「むっ、当然です。黒ウサギは“箱庭の貴族”と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが」

アレ? と黒ウサギは首を傾げる。

箱庭の貴族である黒ウサギが半刻以上も追いつけなかったことを疑問に思ったからだ。しかし

(途端でジョニイさんにあったりしていたのでそのせいでしょうか。 . . . ?)

と今は簡単に結論を出し特に気にもとめずに話を進めていく。

「ま、まあ、それはともかく! 十六夜さんが無事で良かったデス。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神? . . . ああ、アレのことか?」

え? 黒ウサギは硬直する。十六夜は川面にうつすらと浮かぶ白くて長いモノを指さした。黒ウサギが理解する前にその巨体が鎌首

を起こし、

『まだ……まだ……まだ試練は終わってないぞ、小僧オ!!』

なんでも、試練を選べ、と言ってきた蛇神に対し、十六夜を試せるかどうか試させてもらったらしい。

ジョニイは、いやジョニイじゃなくても今の話を聞けば誰でもそう思っただろう。

コイツ、何を言っているんだ?、と

『貴様……付け上がるな人間! 我がこの程度の事で倒れるか!!』

蛇神の甲高い咆哮が響き、巻き上がる風が水柱を上げて立ち昇る。

「十六夜さん、下がって!」

黒ウサギは庇おうとするが、十六夜の鋭い視線はそれを阻む。

「何を言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これは俺が売って、奴が買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ。ジョニイ、お前もだ」

「僕はそんなつもりは無いぜ?」

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

『フン——その戯言が貴様の最後だ!』

蛇神は水を操っているのか、蛇神が雄叫びを上げると竜巻のように渦を巻いた水柱が蛇神の丈よりも遙かに高く舞い上がり、何百トンも水を吸い上げ、周囲の木々をも巻き込んでゆく。

「十六夜さん!」

黒ウサギが叫ぶ。しかしもう遅い。

竜巻く水柱は十六夜の体を激流に飲み込む——!

「ハッ————しゃらくせえ!!」

水柱を殴り飛ばした。

比喻にあらず、周りの木々を巻き込みながら十六夜を襲っていた水柱は、その十六夜の手によって粉碎された。

「ま、なかなかだったぜオマエ」

蛇神の胸元に跳び込んだ十六夜は蛇神が胴体に蹴りを浴びせる。

その蹴りで蛇神の巨軀は空中高く打ち上げられて川に落下した。

更に、十六夜が殴り飛ばした水柱も無くなった。

しかし、水柱に巻き上げられていた木々が重力に従い落ちてくる。

巨大な蛇神よりも高かった水柱に巻き上げられていた木々がその高さから落ちてくるわけで、それはもはや普通の人間なら赤子を殺すより楽に殺すことができるだろう。

そしてその木々の下には、馬から降りているジョニーがいる。

「な、うおおおおお!!」

一瞬、十六夜の行為に絶句したが、すぐに自分の危機に気づく。

ジョニーとしてはあまり自分の能力は知られたくない、がしかし足が使えない以上、避けるという選択肢は無くなる。

必然、彼の能力。幽波紋スタンド、牙タスクを使う他無くなった。

「うおおおおああ a c t . 2!!」

すぐさま巻き上がっている木々とは別の周りの木々に視線を向け、木の葉から黄金長方形のスケールを見つけ出す。

自然界に存在する、約 1 : i . 618 の比率からなる美しい長方形。そこから無限に生み出される回転は、ジョニーの爪を回していく。

ドバツ！ ドバドバツ！ ドバツ！

派手な効果音を立てて爪は回転したまま飛んで行き、着弾した爪弾はかくじつに木々を粉微塵にしていく。

だが圧倒的に数が足りない。

ジョニーが打てるのは両手分十発、既に四発撃った。爪の回復には数分かかる。それに対し、木々はその何倍もある。

「うおおおおおおおおお!!」

ドバツ！

最後に一発分音がしたが、何を破壊することもなく、ジョニーだけが潰された。

「ジョ、ジョニーさん！」

「なんだ？ ジョニーはもう再起不能か？」

十六夜は無慈悲な言葉を告げる。

まるで弱いものには興味無いというようである

「な、何呑気なことを言っているのございませうか!」

「……ここで再起不能って事はその程度ってことだろ。そこまできにする必要は……ん?」

そこまで言って十六夜はなにかに気がついた。

それは落下した木々の残骸の下から移動してきた奇妙な穴だった。その穴は『ギャルギャル』と音を発し、回転しているように見える。

そしてそれは徐々に十六夜に近づいてくる。

不思議に思い穴に触れてみる。普通に考えればこの行為は危険だ、得体の知れないものに触れるのだから。しかし、十六夜はたとえ何が来ても自分がやられる訳が無いという、一種の自惚れにも似た自信を持っていた。

バキイ!

「ツ痛!」

だがそんな十六夜の自信とは逆に十六夜の指はダメージを受けた。指先は穴に触れただけなのにも関わらず、刃物でスタスタに切り刻まれたようになっていた。

「……なんだ? この穴は」

眩いた数瞬後、穴からズズツと何かが出てくる。

十六夜は一瞬で臨戦態勢に入る。

穴から出てきたのは指のような物だった。

ゆつくりと穴から這い出すそれはやはり指であった。そしてその後からは手、腕と次々に穴から出てくる。

腕が出てきたところで、十六夜は警戒を解いた。これが誰なのかわかったからだ。

その腕には特徴的なリストバンドがつけられていたから

## 4. ノーネームの真実

### 4. ノーネームの真実

ギャルギャルギャル

「ツ痛！」

十六夜はその回転しているであろう穴を見て、触れて驚いた。

日本の伝統遊具コマを知らない人はいるだろうか。おそらく今この中にはいないだろう。では、回っているコマに触れたらどうなるか、そんな事、実際やった事が無くてもわかるはずだ。回っているものに触れたら『止まる』のだ。どんな物も外力を受けたら止まる。わかりきっていることだ。

ギャルギャルギャルギャル

だがその穴は回転が衰えること無く回り続けている。それはまるで無限に、永遠に回り続けるのではないかと錯覚するほどだ。

ズズズツ

「ツ！」

そしてその穴から、ゆつくりと何かが出てくる。

ゆつくりと、ゆつくりと。

やがて出てきたのは――

「やはり敵だったか。牙 タスクアクトスリー a c t 3 ツ！」

推定無罪の時点で始末しておくべきだったツ！」

少しの怪我也負っていないジヨニイだった。

「おいおい、ちよつと待てジヨニイ。今のはただの事故だぜ？」

十六夜はこちらを撃ち殺さんばかりの勢いのジヨニイに弁明しつつ、静かに考察していた。

(ジヨニイの能力——本人曰く牙と言っらしいが——は恐らく、いやほぼ確実に指先から何かを撃ち出す能力だ。

攻撃の時、必ず指先を対象に向けている、またやたらめったらに撃たなかったということは弾数制限がある、つまり指先にあり数が決まっているもの。

ジョニイは——いや有り得ないと思うが——爪を撃ち出している可能性が高い。

そして、あの穴から出てきた能力だ。あれは全くわからない、原理すらも)

「ただの事故・・・だつて?」

ジョニイが尋ねる。それも仕方が無いだろう、彼は昨日まで生死を賭けた戦いの最中にいたのだ。

しかし、今回、十六夜たちには悪意はない。

「ああ、俺もまさかお前が潰されそうになるとは思わなかったしな。黒ウサギもその距離じゃ潰される前に助け出すのは難しいだろ」

「事故・・・か。確かにそうだな。すまない、また早とちりをしたみたいだ」

自分の考え過ぎに気づいたジョニイは謝罪をする。

だが、そんな謝罪の声は、それ以前に彼らの会話は黒ウサギには届いていなかった。

(人間が・・・神格を倒した!? それもただの腕力で!? しかも、その十六夜さんを一瞬怯ませるジョニイさんの能力・・・なんてデタラメな——!)

ハツと黒ウサギは思い出す。彼らを召喚するギフトを与えた”主催者”<sup>ホスト</sup>が言った「彼らは間違いなく——人類最高クラスのギフト保持者よ、黒ウサギ」という言葉を。

(信じられない・・・・・・だけど、本当に人類最高クラスのギフトを所持しているのなら・・・!! 私達のコミュニティの再建も、本当に夢じゃないかもしれない!)

黒ウサギは興奮を抑えきれず、鼓動が早くなるのを感じ取っていた。

「おい、どうした? ほーっとしてると胸とか脚とか揉むぞ?」

「え、きやあー!」

いつの間にやら黒ウサギの背後に移動していた十六夜は彼女の豊かな胸や脚の内股へと手を伸ばしていた。

黒ウサギはさっきの感動も忘れて叫ぶ。

「な、ば、おば、貴方はお馬鹿です!?! 二百年守ってきた黒ウサギの貞操に傷をつけるつもりですか!?!」

「二百年守った貞操? うわ、超傷つけたい」

「お馬鹿様!?! いいえ、お馬鹿様!?!」

十六夜たちのおふざけを聞きながら、ジョニイは改めて異世界に来てしまったことを実感していた。

(黒ウサギ、十六、七歳くらいにしか見えないのに、二百歳か……。それにさっきの竜やウサギの耳、本当に僕のいた世界じゃあないのか)

「——おいジョニイ、聴いてんのか?」

「あ、ああ、すまない」

ジョニイが考え事をしているうちに話は黒ウサギのコミュニケーションの話になっていったようだ。

「で、話を戻すが、黒ウサギ達は どうして俺達を呼び出す必要があつたんだ?」

表情には出ていないが黒ウサギの動揺は激しかった。

十六夜の質問は黒ウサギが意図的に隠していたものだからだ。

「それは……言つた通りです。十六夜さん達にオモシロオカシク過ごしてもらおうと」

「ああ、俺も最初はそんな感じの純粋な好意とかかと思つていた。俺は超絶暇だったわけだし、ジョニイ以外からは異論が上がらなかつたつてことは、あの二人にも箱庭に来るだけの理由があつたんだろうよ。だからお前の事情なんて特に気にかからなかつたが———なんだかな。俺には、黒ウサギが必死に見える。ジョニイはどうだ?」

「どうだろう、でも確かに少し必死には見えるかな」  
口調は穏やかだが何か確信めいたような鋭い視線で黒ウサギを見る。

その時、初めて黒ウサギは動揺を表情に出した。

それからは十六夜の質問が黒ウサギに一気に襲いかかった。

彼は自分の憶測を言うが、どうやらそれは当たりだったらしい。

「今のコミュニティの状況を話せば、協力していただけますか？」

「ああ、面白ければな」

「僕はどつちでもいいけど」

「……………分かりました。それではこの黒ウサギもお腹を括って、精々オモシロオカシク、我々のコミュニティの惨状を語らせていただこうじゃないですか」

ほとんど自棄だった黒ウサギが告げた惨状は酷いものだった。

彼女のコミュニティは『魔王』と呼ばれる者によつて、地位も名誉も仲間も名も誇りも、すべてを奪われた。しかも、今のコミュニティのメンバーは、黒ウサギとジンという男の子以外の百二十人はすべてギフトを持たない子供、今住んでいる土地は空き地だらけの廃墟というのだ。

もう崖っぷちである。

だが、それでも彼女達が新しく旗印と名を作らないのは、旗印と名を取り戻し仲間の帰る場所を守りたいという願いからだった。

「ふうん。魔王から誇りと仲間をねえ」

黒ウサギは深く頭を下げて懇願するが、十六夜はやる気の無い声を返す。

（ここで断られたら……………私達のコミュニティはもう……………！）

十六夜はたつぷりと三分間黙り込んだ後、

「いいな、それ」

「……………は？」

どうやら彼女達の状況は十六夜の気に召したようだ。

## 5. 初ゲーム前日

### 5. 初ゲーム前日

黒ウサギは彼女らのコミュニティの事を洗いざらい話した後、当初の目的通り「世界の果て」と呼ばれているイグニスの大滝へと行った。

そして、日が暮れた頃に噴水広場でジン達と合流したのだが・・・「な、なんであの短時間に」フォレス・ガロ」のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!」「しかもゲームの日取りは明日!」「それも敵のテリトリーで戦うなんて!」「準備している時間もお金ありません!」「一体どういう心算つもりがあつてのことです!」「聞いているのですか三人とも!!」

「ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています」  
「黙らっしやい!!!」

どうやら三人が窮地の黒ウサギのコミュニティにさらに問題を持ってきたようだ。

フォレス・ガロとは今現在彼女らのいるここ、二一〇五三八〇外門付近を縄張りとしているコミュニティである。

彼は自らのコミュニティを大きくするために他コミュニティの女子供を攫つては人質とし無理矢理に従わせ、しかもあるうことかその人質は攫った日には殺していたのだという。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思ってるかもしれないけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ? この“  
契約書類ギアスロール”を見てください」

“契約書類”は“主権者権限ホストマスター”を持たない者同士がゲームをする際のルールやチップ、景品が書かれている。

今回黒ウサギが見せてきた“契約書類”には、  
“参加者が勝利した場合、主権者は参加者の言及するすべての罪を

認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する。主催者が勝利した場合、参加者は主催者の一切の罪を黙認する  
“・・・だつてさ”

「確に自己満足だ。時間をかければ立証出来るものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負つてまで短縮させるんだからな」

ジョニーが読み上げた契約書類の内容を聞き、十六夜が黒ウサギの言葉を肯定する。

「そうです。しかも肝心の子供達は・・・その、」

「そう。もうこの世にいないわ。でも、その証拠を掴もうとしたら少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの。それに、私はあの外道が私の活動範囲内で野放しにされている事も許せないわ」

飛鳥が自分の気持ちを告げた。一見自分のためにように聞こえるが、彼女なりの一本の信念が通っている。

この飛鳥の気持ちにはここにいるみんなが共感していた。

「むう・・・。仕方がない人達です。まあ『フォレス・ガロ』程度なら十六夜さん一人いれば楽勝でしょう」

飛鳥の気持ちにおされ、渋々ながらだがゲームへの参加を許可した。

十六夜とジョニーへの評価は高い。ならば二人が出れば安心というやつだ

しかし――

「何言つてんだよ。俺らは参加しねえよ?」

「もちろん、貴方達なんて参加させないわ」

フン、と鼻を鳴らす二人。黒ウサギは慌てて二人に食つてかかる。

「だ、駄目ですよ! 御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「黒ウサギ、そういうことじゃないと思う。これは久遠達が売って、アイツらが買った喧嘩だ。決着を付ける権利は彼女らにだけある」

「あらジョニー君、分かつてるじゃない」

「……………。ああもう、好きにしてください」

丸一日振り回された黒ウサギは、もうどうにでもなればいいと呟いて肩を落とすのだった。

ガルドと戦うことになったノーネーム一行は、ギフト鑑定をするためにコミュニティ“サウザンドアイズ”へと向かうことになった。

黒ウサギが彼らの歓迎会のためにいろいろと準備をしていたようだが、すべて無駄になったのは別の話。

道中、十六夜・飛鳥・耀・ジヨニイの四人は興味深そうに街並みを眺めていた。

桃色の花を散らしている街路樹を見て、飛鳥が呟いた。

「桜の木……ではないわよね？ 花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が残っててもおかしくはないだろ」

「…………？ 今はまだ秋だったと思うけど」

「何を言っているんだ、SBRレースが終わってすぐにこっちへ来たんだ。今は冬だろ？」

ん？ つと噛み合わない四人は顔を見合わせて首をかしげる。黒ウサギが説明した。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」「へえ？ パラレルワールドってやつか？」

「近しいですね。正しくは立体交差平行世界論というものなのですけども…………今はあまり時間がないので、またの機会にということで」

黒ウサギが曖昧に濁して話を終わらせた。どうやら目的地に着いたようだ。

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

・・・目的地に着きはしたが、どうやらここでも一悶着あるようだ。  
「なんて、商売つ無い店なのかしら」

「ま、全くです！ 閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁?! これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!」

キヤーキヤーと騒いでいた黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮辱を込めた声で対応する。

「なるほど、”箱庭の貴族”であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。入店許可を伺いますので、コミュニケーションの名前を聞かせてもらってもよろしいでしょうか?」

「・・・う」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。

「もういい、こんなヤツほうっておいて帰ろうぜ。僕達は別にギフト鑑定なんて受けなくてもいいし」

ジョニイはそう告げるとクルリと馬で器用にUターンする。他の三人も「そうだな」と言った具合に帰ろうとした。

しかし、店の奥から聞こえてくる奇妙な声、そして猛烈なスピードで飛んでくる何かによって、彼らの帰宅は阻止された。

「いいいいやほおおおおおお！ 久しぶりだ黒ウサギイイイイイ！」

黒ウサギは店内から砲弾のように飛んできた幼女に抱フライングホデイアタックきつかれ、街道の向こうにある浅い水路まで飛んでいった。

「・・・驚いた。あんなちっこいのが飛んで来るなんて・・・、流石人外魔境の世界ってことか」

「・・・おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか? なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

黒ウサギへと飛んできたこの幼女はどうやら彼女の知り合いらしい。が、知り合いだとしても過激すぎるスキンシップ、まるでおっさんのような幼女について我慢できなくなったのか、頭をつかんで店に

向かって投げた。

それを足でキャッチしたのはこの流れを楽しそうに見ていた十六夜だった。

「ゴバー！ お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受け止めるとは何様だ！」

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

この一連の流れで十六夜らを除く全員は呆気にとられるのであった。

## 6. 確固たる目的

### 6. 確固たる目的

謎の幼女——白夜叉というらしい——に連れられ、サウザンドアイズの暖簾をくぐり彼女の私室へと向かう。

「もう一度自己紹介をしておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている”サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミユニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」

黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれている。その図を見た四人は口を揃えて

「・・・超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。僕もバームクーヘンだと思う」

「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は”世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこにはコミユニティに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜叉は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝つたのだ？ 知恵比べか？

勇気を試したのか？」

「いえいえ。それは十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩

きのめしてきたのですよ」

「なんと?! クリアではなく直接的に倒したとな?! ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですよ」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

難しい顔で悩む白夜叉に黒ウサギはふと浮かんだ疑問をぶつける。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、あれに神格を与えたのはこの私だぞ」

「へえ? じゃあお前はあのへびより強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東側の四桁以下のコミュニティ最強の『フロアマスター』階層支配者だぞ」

「そう・・・ふふ。ではつまりあなたに勝てば私達のコミュニティは東側最強という事よね」

「無論、そうじゃが。おんしら、私にギフトゲームで挑むと?」

「え? ちよ、ちよつと御四人様!」

「よいよ黒ウサギ。ふふ、そうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておくことがある」

「おんしらが見望むのは『挑戦』か——もしくは『決闘』か?」

刹那、四人の視界に爆発的な変化が起きた。

脳裏をよぎるのは知らぬ景色。

あまりの情報量に微かな頭痛がする。

一瞬景色がフラッシュし気がつくところへ、太陽が水平に廻る白銀の世界だった。

「今一度名乗り直し、問おうかの。」

私は『白き夜の魔王』——

——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが見望むのは、試練への『挑

戦』か？ それとも対等な『決闘』か？」

魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄味に、息を呑む四人。

白夜叉曰く、この世界も彼女のゲーム版の一つという。その事実  
に十六夜達は再度息を呑む。

「参った。やられたよ。降参だ白夜叉」

しばしの静寂の後——諦めたような笑みを浮かべ十六夜が拳手  
をした。

「ふむ？ それは決闘ではなく、試練を受けるといふことか？」

「ああ、これだけのゲーム盤を用意できるんだからな。あんたには資  
格がある。——いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

十六夜は苦笑と共に吐き捨てるように言う。

「く、くく……して、ほかの童達も同じか？」

「……ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

「ああ。別に、戦う意味も無いしな」

一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸をな  
でおろす。

「も、もう！ お互いにもう少し相手を選んでください！ 階層支  
配者」

に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う「階層支配者」な  
んで、冗談にしても寒すぎます！ それに白夜叉様が魔王だったの  
は、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「何？ じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかな？」

ケラケラと悪戯っぽく笑う白夜叉。ガクリと肩を落とす黒ウサギ  
と三人。しかしジョニイは一人あまり興味のなさそうな顔で周囲の  
白銀の世界を見回している。

親友から回転の技術を教わってから、新たな土地に来たらず、黄  
金長方形を探すのが癖になっているようだった。そして彼はふと思  
い出したように言った。

「なあ黒ウサギ。ここに来た目的、忘れてるわけじゃあないよな？」

正直な話、彼は早く『ギフト鑑定』なるものをしてほしかった。

この世界に来て歩けなくなつた理由は分らないが、何かとても大きな違和感をずっと感じていた。その違和感をなくし、脚を治し、元の世界に戻るには少しでも多くの情報が必要だ。

「あ、そうでした」

「なんだ？ 何か目的があつてここにきたのか？」

「ああ、ギフト鑑定をしてくれ、白夜叉」

「うつ、金髪の小僧、今ギフト鑑定といつたか？ よりにもよつてそれか。専門外どころか無関係もいところなのだが」

困つたように頭を掻く白夜叉は、突如妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑つた。

「よかろう。おんしらのギフト、鑑定はできんがそれなりのことはできる」

「本当ですか!？」

「ああ、しかし一つ条件がある。先ほどおんしらを試すといつたからの、私がおんしらのギフトを鑑定をするに値すると思えたならばやつてやろう」

「別に俺らは鑑定なんか——」

「——そんなことでいいのか？ 何をすればいい？」

十六夜の言葉を遮りジョニーが質問をする。

「ちよつとジョニー君、一人で話を進めないでくれないかしら？ 私たちは別に鑑定してほしいとは思つてないわよ？」

はつきりと拒絶するような声音の飛鳥と、それに同意するようにならずく二人。

「関係ないね。あんたたちが鑑定しなくてもいいなら僕一人でも試練を受けるさ」

決めたことは覆さんと言うかのように意思と決意のこもつた言葉に、さすがの飛鳥もたじろぐ。

「僕には目的があるんだ！ この再び動かなくなつてしまった脚を動かすという！ 元の世界に戻つて親友の遺体を彼の故郷へと送るという目的がッ！ そのためだつたらなんだつてするさッ！ どんな

「ことでもツ!!」

「・・・わかったよ。まったく、今日は妥協してばっかだ。いいぜジョニイ、俺も試練を受けてやるよ。元・魔王様がどんな試練を出すのか気になるしな」

十六夜達はジョニイの勢いに押されつつも試練を受けることになった。

## 7. ギフト

### 7. ギフト

白夜叉が用意した試練というのは、鷲獅子グリフオンの背に跨り湖畔を舞う、というものだった。

「この鷲獅子に勇氣、知恵、力のどれかを示せばいいんだろう？ いいぜ、そのくらい僕一人でも——」

「私にやらせて」

春日部が名乗りを上げた。しかしもともと試練に乗り気ではなかった三人にジョニーは参加させるつもりはなかった。

「・・・悪いけどあんた達には任せられない。僕がやる」

「私にやらせて、お願いします」

真剣に頭を下げる春日部。グリフォンと聞いてからの食い付き、彼女にも譲れない何かがあるのだろう。

しばらくの沈黙の後、折れたのはジョニーだった。

「うっ・・・わかった！ わかったよ！ わかったから頭を上げろ！」

「本当に！ ありがとう！」

「ただし、負けたら容赦しないからなッ！」

「もちろん負けるつもりはないよ」

足が動かないというアドバンテージ、彼はこのゲームは分が悪い事を理解していた。

渋々、本当に仕方がなく彼女に任せることにした。

白夜叉・・・否、グリフォンとのギフトゲーム。

春日部は『命』を、グリフォンは『誇り』をかけたゲームは春日部が何とかクリアできた。

「うむ。試練をクリアしたおんしらへちよいと贅沢な代物だがサービスをしよう。コミュニティ復興の前祝いだ」

パンパンと白夜叉が柏手を打つと、四人の眼前に光り輝くカードが現れる。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム”コード・アンノウン 正体不明

”  
ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム” 威光”  
パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム” 生命の目録  
” ノーフオーマー”  
アイルストーンブルーのカードにジヨニイ・ジヨースター・ギフト  
ネーム” 幽波紋使い” ” 立ち向かう者：牙” ” 漆黒の殺意”  
” 聖人の遺体：左腕部”

「ギフトカード！」

「？ なんだ、それ」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「ち、違います！ というかなんで皆さんそんなに息が合ってるのです!? このギフトカードは顕現してるギフトを収納できる超高価なカードですよ！」

「つまり素敵アイテムってことでオツケーか？」

「だからなんで適当に聞き流すんですか！ あーもうそうです、超素敵アイテムなんです！」

黒ウサギに叱られながら四人はそれぞれのカードを物珍しそうにみつめる。

「我らの双女神そうめがみの紋のように、本来はコミュニケーションの名と旗印も記されるのだが、おんしらは” ノーネーム” だからの。少々味気ない絵になっているが、文句は黒ウサギに言ってくれ」

そう言っただけのギフトカードを見せる白夜叉。彼女のカードには2人の剣を持った女神が向かい合っている。

「そのギフトカードは、正式名称を” ラプラスの紙片”、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった” 恩恵ギフト” の名称。鑑定はできずともそれを見れば大体のギフトの正体が分かるというもの」

「へえ？ じゃあ俺のはレアケースなわけだ？」

ん？ と白夜叉が十六夜のギフトカードを覗きこむ。そこには確かに ” 正体不明 ” の文字が刻まれている。ヤハハと笑う十六夜とは対照的に、白夜叉は表情の変化は劇的だった。

「・・・いや、そんな馬鹿な」

白夜叉は顔色を変えて十六夜からギフトカードを取り上げる。

” 正体不明 ” だと・・・？ いいやありえん、全知である ” ラプラスの紙片 ” がエラーを起こすはずなど

「何にせよ、鑑定は出来なかつたってことだろ。俺的にはこの方がありがたいさ」

むむむ、と白夜叉が納得出来ずに考えを巡らしている隣でジョニーも驚きに目を見開いていた。

「馬鹿なッ！ いや、しかし・・・少し前からあった違和感。なぜ・・・なぜ聖人の遺体がここに・・・ッ！」

ここに存在するはずのないモノ。

ここに存在しては行けないもの。

ジョニーは自身の左腕、その恩恵から恐ろしいほどの重圧を感じていたのだった。

六人と一匹は暖簾の下げられた店前に移動し、耀達は一礼した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むものだもの」

「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて、格好付かねえからな。次は渾身の大舞台で挑むぜ」

「いつか、勝てるようになったら、改めて、挑ませてもらうよ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。・・・ところで」

白夜叉はスツと真剣な顔で黒ウサギ達を見る

「今さらだが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニケーションがどういう状況にあるか、よく理解しているか？」

「ああ、名前とか旗の話か？ それなら聞いたぜ」

「ならそれを取り戻すために、『魔王』と戦わねばならんことも?」  
「聞いてるわよ」

「・・・では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな?」

「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

「『カッコいい』で済む話ではないのだがの・・・全く、若さゆえなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういうものかはコミュニティに帰ればわかるだろ。それでも魔王と戦う事を望むというなら止めんが・・・その娘二人と小僧。おんしらは確実に死ぬぞ」

春日部、久遠、ジヨニイを正面から見据え、予言するかのように断言する。三人は一瞬だけ言い返そうと言葉を探したが、魔王と同じく”主催者権限”を持つ白夜叉の助言は、物を言わさぬ威圧感があった。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧はともかく、おんしら二人の力で魔王のゲームは生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれて死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

久遠と春日部は白夜叉の経験から来る確信にも近い予言にゴクリと生唾を呑み込む。

「そしてバンダナの小僧。おんしはいくつかの死線を潜ってきたのであろう? そういう目をしておる。だがここでは勝手が違う、このままで生き残れると思うな」

「ご忠告どうも、でもそんなの僕には関係ないね。僕には目的があるんだ、そのためだったらなんだったって利用してやる」

「ふふ、そうか。おんしがそれで良いのなら良い。娘二人も覚悟をしておくのだな」

「ご忠告ありがとう。肝に銘じておくわ。次は貴女の本気のゲームに挑みに行くから、覚悟しておきなさい」

「ふふ、望むところだ私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに来い。・・・ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうかの」

「嫌です！」

「つれない事を言うなよう。私のコミュニティに所属すれば生涯を遊んで暮らせると保証するぞ？三食首輪付きの個室も用意するし」

「三食首輪付きってソレもう明らかにペット扱いですから！」

怒る黒ウサギ。笑う白夜叉。店を出た四人と一匹は無愛想な女性店員に見送られて”サウザンドアイズ” 二一〇五三八〇外門支店を後にした。

場所は再び白夜叉の私室。

そこにいるのは二人、部屋の持ち主白夜叉と異邦人ジヨニイ・ジヨースター

「して、聞きたいことというのはなんだ、小僧。わざわざ一人で引き返してきたのだ、あの四人にはあまり聞かれたくない話なんだろう？」

「・・・単刀直入に聞く、並行世界の中でひとつの世界にしか存在のしない物つてあるのか？」

## 8. 聖人の遺体

並行世界の中でひとつの世界にしか存在のしない物はあるのか。たったひとつの疑問、しかしそれは彼のギフトに関係する重大な疑問だ。

「ふむ……そんな奇妙なものは存在しない。どんな物もあらゆる世界線で姿形が違えども必ず、何かしらの形で存在する」

ここで一度話をきり、白夜叉はジョニイの様子を伺う。

驚いたような、困惑したような何とも言い表せない表情に白夜叉はやはりな、と一人で納得していた。

というのも彼女はジョニイの質問の意図を理解していたのだ。ジョニイは知っているのだろう、彼の言う『あらゆる世界線で一つしか存在しない物』を。

「……本当に存在しないのか?」

「ああ、本当だとも。1本では自立しない爪楊枝も何十、何百と束ねれば自立するように、存在とは多くの世界で同時に存在しなければとても不安定になってしまうものだ」

「……………」

白夜叉の説明は理解できた、しかし納得ができなかった。

それならば彼が見たモノは、彼のその身に宿している聖人の遺体は一体何なのだ。

「その『あらゆる世界線で一つしか存在しない物』とやらを見せてみよう」

持っているんだろう、そう尋ねられジョニイは悩んだ。彼女には遺体を見せてもよいものかと。

しばらく黙考し、彼はそつとギフトカードを取り出し、若干の警戒を残しつつ白夜叉に見せる。

「成人の遺体……左腕部……これか? 実際にモノを見せてみる」

ジョニイは静かに左腕を前にだし左腕から遺体を抜き取った。

白夜叉もまさか左腕の中に入っているとは思わなかったのだろう。目を見開き遺体を見た。

遺体を受け取りしばらくの間それを眺めなると、これは……と唸る。

「わかったのか？ それがなんなのか」

「先程も言ったようにギフト鑑定は専門外なんでな、私の憶測も混じっているが……」

無言で続きを促すジョニー。

礼儀を知らんやつだ、とは口に出さずどう説明したものかと言葉を選ぶ。

「この遺体、たしかにひとつの世界にしか存在しない。……しかし複数の世界に存在するのも確かだ」

「……………？ ちょっと待ってくれ、一体どういう事だ？」

混乱

白夜叉の言葉は一瞬前の自分の言葉と矛盾する。

ジョニーにはその真意を図りかねる。

「ああそうだ。仮に遺体のある世界線を基準世界としよう。おんしは何故基準世界か一つであると思ひ込んでおるのだ？」

「どういう……………意味だ……………？」

「木の幹から枝が生えるように基本世界から並行世界が枝分かれしている。そしてその木は何本もあるわけだ」

例えばある基準世界では他の基準世界では開催されないアメリカ大陸横断レースが開催される。

例えばある基準世界では大きく発展した科学知識がある。

例えばある基準世界では他の基準世界には存在しない大財閥がある。

「そしてそれぞれの基準世界からまたさらに細かく並行世界が広がっている。イメージとしてはこんなものだ」

あくまでもイメージだと付け加える白夜叉。

事実として立体交差並行世界として詳しく説明しようとなるとこのお茶菓子が少なくともあと1ダースは必要になる。故のイメージだ。

「その聖人の遺体とやらが小僧のギフト『立ち向かう者』とやらと関係

があるのだろうか？」

「またも彼は目を見開く。」

「一体何度この少女に驚かされれば良いのだろうか。」

「……………その通りだ。関係しているさ、僕のスタンドにも。そして、僕はこの脚を治す為にも遺体を集めなくてはならないッ！」

なるほど合点がいった、とようやく白夜又は彼の質問の本当の意味を理解した。

「して、私にその遺体を集めてほしいんだな」

「いや、遺体を集めるのは僕だ、僕だけの権利だ。あんたには探してほしい。どこにあるのか、誰が持っているのかを」

白夜又は目を丸くして呆気にとられた。彼女ほどの権力があれば箱庭中から情報を集めるどころか遺体の一つや二つ簡単に集めることが可能だ。

しかし彼はあくまで自らの手で集めるつもりなのだ。

「く、くくく……………。よかろう、そのくらいであれば協力してやろう」話をまとめたジョニイはサウザンドアイズ二一〇五三八〇外門支店を後にした。

\*

ガルドは彼の屋敷で頭を抱えていた。

「くそ……………くそ、くそくそくそこのドチクショウガア!!!」

彼は身近にあった執務机を持ちあげて窓の外に放り出した。ガラスの割れる音が彼の苛立ちを加速させる。

黒ウサギコミュニティの“箔”としても“駒”としても彼の欲を満たす玩具としても欲しかった人材であった。しかし彼は先走りすぎってしまったのだ。

「あの女……………あんなのがいたら勝ち目なんてねえぞ！」

彼の頭痛の原因である女性を思い浮かべさらに頭痛が悪化する。

直接精神に触れるようなギフトに対して有利に戦えるようなゲームなど彼には皆目見当がつかなかった。

頭を抱えているガルドに、割れた窓の向こうから凜とした女の声がかかる。

「——ほう。箱庭第六六六外門に本拠を持つ魔王の配下が“名無し”風情に負けるのか。それはそれで楽しみだ」

「っ、誰だ!？」

あらわれたのは華麗な金の髪を靡かせた、十六夜達よりも二、三歳年上の女性だった。

「テメエ………どこのどいつか知らねえが、俺は今気が立ってるんだ。牙を？かねえうちにとつとと失せろ」

「まあそう言うなよ。私もあの“名無し”には少々因縁があつてな。お前が勝てるようにギフトをいくつかやろう」

「うるせえ！ か、勝てるわけがねえだろ！ お、俺はあのガキ共に手も足も出なかつたんだ！」

「うむ。今のお前では万に一つも勝ち目はないだろうな。しかしお前が“鬼種”のギフトと神格にも匹敵するギフトを手に入れたとしたらどうする？ 勝ち目も出てくるのではないか?」

ここにきてガルドは初めて女と目を合わせた。

「……………俺に“六百六十六の獣”を裏切れと？ それに神格に匹敵するほどのギフトがそう簡単に存在するわけがねえ」

「結果的には裏切ることになるな。たとえ神格の話が嘘だったとしても“鬼種”が手に入るだけでも儲けものだろう?」

「……………」

ガルドは冷静さをわずかに取り戻していた。

しかし、彼女に利用されようとしていないことがわかっていても乗らない手がない状況であることも理解していた。

「さあ、どうする？ ギフトを受け取らずに潔く裁かれるか、ギフトを受け取り無罪を勝ち取るか」

「ツチ。選択肢はねえか、いいぜ。けど時間がない。種族そのものを変質させるにはどれくらいかかる?」

金髪の少女は楽し気に頬を緩ませた。

「ふふ、それなら気にするな。今この時、この場の僅かな時間で済む。

先にこれを渡しておこう」

「何?」

彼女はガルドに人間の下半身のようなモノが渡された。

ソレを彼が受け取った瞬間ソレはガルドの下半身と同化した。

「おい! どうなって——」

ガルドが取り乱した瞬間、金髪の少女の牙は首筋を食い破った。

「ギャ、ガッツツツ!?!」

刹那、細胞の一つ一つが燃え盛るような苦痛に襲われ彼は意識を手放した。

「さてさて。どう出る、新生”ノーネーム”」

## 9. ハンテイング

——箱庭第二一〇五三八〇外門”ノーマム”本拠。

屋敷の廊下にキコキコと車輪の回る音が響く。日が昇ってから数刻、早朝と呼ぶにふさわしい時間で空はまだうつすらと色づいたころだった。

音の主、ジョニイジョースターは小さくため息をついた。つい先日まで彼はSBRレースに参加しており日の出と共に起床する癖がついてしまっていたようだ。むしろゆつくりと寝すぎた程か。

「この厨房……、まあ勝手に使っても問題はないか」

本拠一階にいくつかある厨房の一つに入る。

およそ半年の間アメリカ大陸で野宿をしてきただけあり最低限の料理は——なんならまともな調理器具が無くとも——できる。無難にパスタをゆで、食堂まで移動する。

広い食堂でもくもくとパスタを口に運んでいると、閉まりきっていなかった食堂の扉からひよコン！ と狐耳が頭をのぞかせた。

「あ！ ジ、ジョニイ様、おはようございます！」

「君は……えーと、確か……」

「リリと申します。ジョニイ様は朝お早いですね」

「……見ての通り僕の分の朝食はいらさないからな」

しまった、年端もいかない少女に対し冷たい物言いだったか。と気づき言い直そうと彼女の方へ顔を向けると、リリは百点満点の笑顔を向けていた。

「わかりました！ またお腹が空いたときはいつでも言ってください  
い」

「あ、ああ。その時は頼むよ」

「はい！ 今日は頑張ってください！」

どうやら彼女には気にならないようで、その前向きさと早朝からの元気いっぱいな姿に少しばかり尊敬の念を抱き、ジョニイは食堂を後にした。

\*

——箱庭第二一〇五三八〇外門。ペリベッド通り・噴水広場前。

“フォレス・ガロ”の居住区画へとむけて移動していた“ノーネーム”の面々は“六本傷”の旗が掲げられた昨日のカフェの前で声をかけられた。

「あー！ 昨日のお客さん！ もしや今から決闘ですか？」

『お、鉤尻尾のねーちゃんか！ そやそや今からお嬢達の討ち入りやで！』

ウエイトレスの猫娘は近寄つてくると一礼した。

「ボスからもエールを頼まれました！ この外門にいて連中に不満のない人なんていないくらいですよ！ どの区画でもやりたい放題でしたもの！ 二度と不義理な真似が出来ないようにしてやってくださいー！」

力強くエールをおくる鉤尻尾の猫娘に飛鳥は苦笑しながらも強く頷いて返した。

「もちろん、そのつもりよ」

「おお！ 心強い御返事だ！」

満面の笑みで返す猫娘だったが、急に声を潜めてヒソヒソと呟いた。

「実は皆さんにお話があります。“フォレス・ガロ”の連中、今回のゲームを舞台区画じゃなくて居住区画で行うみたいなんですよ」

「居住区画ですか？」

返答したのは黒ウサギ。初めて聞く単語にジヨニイ達は首をかしげるがそれを見たジンが補足をした。

「舞台区画というのは居住区画とは別にギフトゲームを行うための区画です。ほかにも様々な区画がありますが、今回のようなギフトゲームは舞台区画でやるのが普通なんですけど……」

「しかもですよ！ 傘下に置いているコミュニティや同士をみーんなほっぴり出してるんですよー！」

「…………それは確かにおかしな話ね」

「でしよでしょ?! 何のゲームかは知りませんが、とにかく気を付けてくださいね!」

熱烈な応援を背に“フォレス・ガロ”の居住区画へと向かった一行はその有様を見て目を疑った。というのも、その居住区画が森のように豹変していたのだ。

ツタの絡む門をさすり、鬱葱と生い茂る木々を見上げて耀は呟く。  
「……………ジャングル?」

ジンはそつと木々に手を伸ばす。その樹枝はまるで生き物のように脈を打ち、肌を通して体動のようなものを感じさせた。

「やっぱり——」“鬼化”してる? いや、まさか」

「ジン見ろ、“契約書類ギアスロールだ。ここに貼ってある、門のところ」

馬上からの声につられ一契約書類・ギアスロール・に集まる面々。門柱に貼られた羊皮紙には今回のゲームの内容が記されていた。

『ギフトゲーム名』 “ハンティング”

・プレイヤー一覧

久遠 飛鳥

春日部 耀

ジンⅡラッセル

・クリア条件 ホストの本拠内に潜むガルドⅡガスパーの討伐。  
・クリア方法 ホスト側が指定した特定の武具でのみ討伐可能。指定武具以外は“一契約《ギアス》”によってガルドⅡガスパーを傷つける事は不可能。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・指定武具 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“フォレス・ガロ” 印』

「ガルドの身をクリア条件に……指定武器で打倒!!」

「こ、これはまずいです!」

ジンと黒ウサギが悲鳴のような声をあげる。

「あいつを始末すればいいわけだろ? 討伐ならそう難しくない」

「確かに御二人であれば討伐も容易でしょう。問題なのはルールの方です。このルールでは飛鳥さんのギフトでも、耀さんのギフトでもガルドに危害を加えることができない事になります……………」

理解が追いつかない面々に十六夜が補足をする。

「つまりその〃指定の武器〃でしかあいつを討伐できないってことだ。他の方法で攻撃しても〃契約<sup>ギアス</sup>〃の力で怪我にもならない」

「すいません、僕の落ち度でした。初めに〃契約書類〃を創ったときにルールもその場で決めておけばよかったのに……………」

ルールを決めるのが〃主権者<sup>ホスト</sup>〃であるとはすなわち、白紙のゲームでは命を握られたも同然。ジンのギフトゲーム経験のなさに付け込まれたのだ。

「だ、大丈夫ですよ! 〃契約書類<sup>ギアスルール</sup>〃には『指定』武器としっかり書いてあります! つまり最低でも何らかのヒントがなければなりません。もしもヒントが提示されなければルール違反でこちらの勝利です! この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも!」

愛嬌たっぷりな励ます黒ウサギと〃ノーネーム〃の面々に各々が気合いを入れ直し、ついに飛鳥達の初めてのギフトゲームが幕を開けた。

\*

——箱庭第二一〇五三八〇外門。フォレス・ガロ居住区画

敷地内は木々が薺<sup>ひし</sup>めき光さえも遮っていた。住居には木の根が絡みつき、樹木に貫かれ倒壊しているものもある。ほんの昨日まで人が住んでいたとは思えない有様だった。

森の奥には豪華な館があり、ここがフォレス・ガロの本拠であるこ

とが見て取れる。とは言ってもこの館も他の住居と同様に木の根に蝕まれており、宛ら主を亡くした別荘と言ったところか。

ギフトゲームが開始して暫く、久遠飛鳥とジンIIラッセルはその館から少しの茂みに身を隠していた。

「とりあえず、もう一度状況を整理したいわ。ほんとにあれが昨日会った似非紳士なの？」

「はい。彼は元々、人・虎・悪魔から霊格を得たワータイガーでした。ですが彼の様子やこの居住区画の様子を見る限り吸血鬼によって人から鬼種に変えられたのでしょうか」

二人は先程、本拠の館で対峙した虎の怪物を思い出していた。出会い頭の力強い咆哮、目にも止まらぬ突進から辛うじて逃げられたのはこの場にはない春日部耀が殿を務めてくれたお掛けだ。

「そして恐らくは彼が背後に守っていた白銀の十字剣が今回の指定武器じゃないかと」

「吸血鬼に銀と十字架……ね。それなら春日部さんと合流したら十字剣を奪う方法を考えなくてはいけないわね」

理性のない獣と化したガルドを相手にどう立ち回れるか、如何にしてあの剣を手に入れるのか。グルグルと思考を回しているその傍で不意に茂みが揺れた。

「誰？」

「……私」

茂みから出てきたのは血だらけの耀だった。

「か、春日部さん！ 大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃ……ない。ちよつと本気で泣きそうかも」

右腕を抑えフラフラと歩いていたが、ついで痛みに耐えかねその場で崩れ落ちる耀。その手には白銀の十字剣が握られていた。

飛鳥は崩れ落ちる彼女の様態を見て血の気が引いた。

十字剣を握る右腕のからの出血が一際目を引くが、しかし怪我は右腕だけではなかった。腹部や背中、脚に至るまで身体中が切り傷だらけでここまで辿り着けた事に驚く程だ。

「春日部さん……いったい、何が……」

「なにか……変なギフトを持つてる……。床が緩んで……。動きにくくて……」

「耀さん！　まずは先に治療です！　ちゃんとした事はできませんが、応急処置だけでも！」

自信が着ていたローブをなんとか破り、耀の傷に巻き付けていく。多量の出血を防ぐために気休め程度でも止血をするジンを一瞥した飛鳥は、白銀の十字剣を手にスクリと立ち上がった。

「ジン君、春日部さんをお願い。今からあの虎を退治してくるわ」

「ちよ、ちよつと待つてください！　一人じゃ無理です！　悔しいですがここはもう、降参しましょう！」

ジンは、このまま戦えば新たに来た仲間達を失うことになる、それだけは避けなければならぬと飛鳥を引き止めた。焦るジンに飛鳥は冷静な声音で返す。

「大丈夫よ。知性の無い獣に負ける程ヤワじゃないわ。——それに、悔しいじゃない？　私達が頼りなくて春日部さんは一人で戦ったのよ？」

情けない。あれだけ大口で喧嘩を吹っ掛けておきながら、実際はどうだ？　対峙し、逃げることしかできなかった。

春日部耀はあの虎と戦うために久遠飛鳥が戦力にならないと、そう判断されたのだ。

「十分で決着をつけるわ。少しだけ我慢して」

「……飛鳥」

「大丈夫よ、春日部さん。今は休んでいて」

「気をつけて……。あいつは潜るんだ……。壁にも床にも……」

「潜る……。ええ、わかったわ。ありがとう、行ってくるわ」

そうして館の方へと進む飛鳥の背を見届け、耀は意識を失った。

\*

ふわりと、いつもと違ったどこか焦げ臭い匂いにふと顔を上げた。

屋敷の二階に蹲っていたガルドⅡガスパーは屋敷の異変に流血の

止まらない左足を引き摺りかつての執務室から出た。

(屋敷が……燃えている……!?)

咄嗟に屋敷から飛び出す。その胸中に渦巻くのは怒り、恐怖、困惑。私の屋敷が、炎はダメだ逃げなくては、一体なぜ。

ガルドは炎から逃れるように、血の匂いに釣られるように、森の中、左右に分かれた木々合間を走り抜ける。辛うじて保っていた最後の理性は木々の先、標的の元へ辿り着く頃には既に欠片程も残っていないかった。

「……待っていたわ。思っていたより早かったのね」

瓦礫に灯した炎と白銀の十字剣を手に飛鳥は理性をなくした虎を睨みつける。

諸手に携えられたそれに、ガルドはジリリと僅かに後ずさりした。理性のない彼の本能からの恐怖だった。

「あら、今さら尻込みかしら? ……今の貴方に言葉は通じなさそうですね。春日部さんの事もあるし、これ以上時間は割けないの。だから」  
炎を脇に投げ捨てる。それを合図に両者は動いた。

「一体一です。来なさい」

「G E E E Y A A A A a a a a !!」

虎と少女、対峙してどちらに軍杯が上がるかなど問題にもならない。しかし、この少女はほぼ手付かずの原石の才能を持っていた。

原石を一つの方向へ磨き始めた彼女が理性のない獣に負ける道理は無かった。

「今よ、拘束なさい!」

「G E E E Y A A A A a a a a a a a !!」

——はずだった。

飛鳥の一喝で鬼種かした木々が一斉にガルドへと枝を伸ばした。一直線に道を絞り、狙いを自分に向け、死角からの拘束。勝利の為に知恵を絞り、必中の状況を作った。

しかしその枝々がガルドを拘束するその瞬間、ガルドは姿を消したのだ。

「消えた!?!」

辺りを見回す。身を隠せる場所など、無い。一体どこへ。  
ふと、足元へ視線が降りる。ズズズと地面が沈んでいた。まるで沼の上のようにゆっくりと沈んでいく。

（春日部さんの言っていた現象！ 館の中だけでは無いの!?!）

耀が気を失う前に残した情報。飛鳥は特殊なギフトを使い館に細工したのだと考えていた。

（人の言葉も解らなくなっているガルドが館に細工？ そんなわけないじゃない!!）

思考を回す。

これはガルド自身のギフト、どんな能力かを見極めなくては。地面が緩い、でも姿を消した事と何も関係がない。春日部さんは潜ると言っていた。なら地面の下!?! でも館とは違ってこの下には反対側がないわ、壁や床を通り抜けるのとは訳が違う。

グルグルと回る思考と相反して、チリチリと焦りが募る。虎と少女、策がなければ負けは必至。耀の怪我もある。時間をかけて不利になるのは飛鳥の方だった。

理性があろうとも、ただの少女は理性の無い獣には勝てないのだ  
焦り、思考。故に周囲を警戒していても気づけなかった。

「GEEYAAAAa!」

「後ろ!?!」

背後からの攻撃に辛うじて十字剣を間に挟み込む飛鳥。ガルドは十字剣を嫌がり即座に距離をとる。

そして、地面に沈んでいくガルドを目にした。

「やっぱり地面の下に!」

尻餅をついた飛鳥は即座に体勢を立て直す。

泥のような地面を触ってみれば、手触りは何の変哲もない地面だった。普通の地面、なのに沼のように沈んでいく。理解の外にある現象だった。

「とにかくこのまま動かないのはまずいわ!」

背後に潜ったガルドから逃れるように走り出した。

\*

息を切らし走り続ける飛鳥は既に満身創痕と言えるほど傷だらけだった。足を止めてしまうほどの重症がないことが不幸中の幸いだが、決して軽傷では無い。

飛鳥は走りながらもガルドの攻撃を具こぶに観察し、ギフトの能力の当たりをつけていた。

(彼の能力。きつとあれはあの前足で触れた物を液化化させる能力に違いないわ。館でもここでも地面に触れてドロドロに溶かしていたんだわ！)

地中や水中などの空気中よりも密度の高い空間は、空気中と比較して音の伝達も早いと言われている。そう考えれば地中からこちらの位置が把握されるのも納得が行く。動物の聴力を持ってすれば尚更だ。

「はあ、はあ。もう、逃げるのは辞めましょうか」

ただ逃げていた訳ではなかった。辿り着いたのは元の場所。そこは未だに轟々と焔をあげているフォレス・ガ口本抛の館。

左右は木々の道、後ろは炎の壁。いくら地中へ潜れようとも、もう攻撃は正面からしか来ない。

「G E E Y A A A A A A A A A A a a a a !!」

「ううっ!! きゃあー!」

まるで飛魚のような器用さで地中から飛鳥へと飛びつくガルド。来る方向が分かっても受け止めるのは容易ではない。

勢いそのままに弾き飛ばされる飛鳥。元から不利な状況だった飛鳥は、背に地面を背負った事でさらに不利な状況となってしまった。相對する敵が地に伏せている。負けるわけがない。ガルドは勝利を確信し飛鳥へと飛びかかった。

「G E E E E Y A A A A A A A A A A a a a a !!」

ガルドの体が飛鳥を覆い隠し、そして――

「G Y A …… A a ……」

「――よかったわ、上手くたって」

ガルドの頭を白銀の十字剣が貫いていた。

「私の力じゃきつと、なんの拘束もない貴方に剣を突き刺すなんて無理だったわ。だからこうして、貴方と私の力比べじゃなくて貴方と地面に力比べして貰ったの」

深々とガルドの頭蓋を貫く十字剣の柄は突っ張り棒の様に地面へと伸びていた。

「正直、怖かったわ。失敗なんてできないもの」

冷や汗を拭う飛鳥は、サラサラと灰になっていくガルドに呟いた。

「今さら言っつてはアレだけど……貴方、虎の姿の方が素敵だったわ」

ガルドが完全に灰となると、周辺の木々も一斉に霧散した。

樹に支えられていた廃屋が、炎に焼かれた館が、居住区画の建物が倒壊していく音を聞き、飛鳥は達成感と疲労感からか瞼が重くなつていくのを感じた。

ガルドの灰の中に埋もれた奇妙な遺体が自身の身体へと入り込んでる事に気づく暇もなく、飛鳥の意識はプツリと途切れた。